

TP



顧みて学ぶ、富山大学の築き。

地域との共育

考究の歩み

世界との連結

教員が顧みる、富山大学の築き

顧みて学ぶ、富山大学の築き。

古い「築き」を振り返ると見えてくる、新たな「気付き」。「温故知新」の理念から、140年以上にわたり幾多の歩みを築いてきた富山大学の歴史を紹介します。

1873

富山県教育発祥の地記念碑

1873(明治6)年、現在の富山市北新町に、新川県小学校教員講習所が設置された。



1893

富山薬学専門学校

1893(明治26)年、富山の売薬業界の協力のもと、共立富山薬学校(私立)が設立された。その後、全国で初めて薬学専門学校として、富山県立薬学専門学校が誕生。1920(大正9)年、官立の富山薬学専門学校に引き継がれ、薬学部の前身となった。



1875

富山師範学校

小学校の設置に伴う教員の需要に応えるため、1875(明治8)年に校舎を新築。富山県師範学校、同女子師範学校は、小学校教員の養成学校として富山県の教育の礎を築いてきた。1943(昭和18)年には官立の富山師範学校に引き継がれ、教育学部(現:人間発達科学部)の前身となった。



1923

旧制富山高等学校

高等教育機関の充実を望む県民の要請に応え、富山市東岩瀬の馬場はる氏からの多額の寄付により1923(大正12)年に旧制富山高等学校が誕生した。1943(昭和18)年に官立の富山高等学校に引き継がれ、文学部(人文学部、理学部の前身)の母体となった。



1931

富高祭

旧制富山高等学校での富高祭の様子。

高岡短期大学第1回卒業制作展ポスター。



薬草園

昭和戦前期、富山薬学専門学校の温室・薬草園(現:富山市奥田町)の様子。



入学式

開した富山医科薬科大学の第1回入学式。



1924

高岡高等商業学校

1924(大正13)年、当時商部として有名であった高岡に、全国で13番目の官立高等商業学校として高岡高等商業学校が設立された。その後、戦争遂行のための工業技術者養成という国家的な要請により、1944(昭和19)年に高岡工業専門学校へと転換。工学部の前身となった。また、転換前の経済学科は富山大学文学部内におかれ、経済学部の前身となった。



1949

新制富山大学

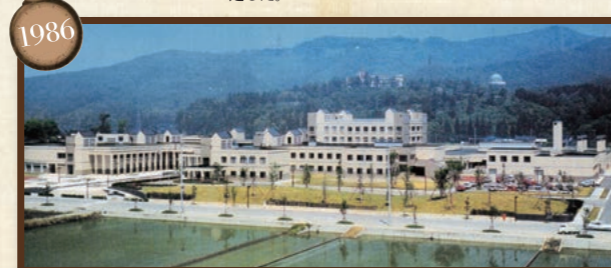
新制富山大学は、1949(昭和24)年に文学部・教育学部・薬学部・工学部の4学部をもって発足。現在の五福キャンパスの場所には、敗戦まで旧歩兵第35連隊が駐屯していた。



1975

富山医科薬科大学

1975(昭和50)年、医学部と富山大学から移行した薬学部を併設した富山医科薬科大学が発足した。



1986

高岡短期大学

1983(昭和58)年、高岡短期大学が開学。当初は富山大学構内が所在地だったが、1986(昭和61)年には校舎が竣工し、現在の高岡市二上町のキャンパスへ移転した。



三大学統合

富山医科薬科大学で行われた調印式の様子。2005(平成17)年、3大学が再編・統合し、新しい富山大学として生まれ変わった。



1969

五福キャンパスの昔

1969(昭和44)年の五福キャンパス。メインストリートのユリノキ(チューリップツリー)はまだ植えられていない。



学生の服装

戦前の高岡高商生寮(仰臥寮)中庭にて。



ダンスパーティー

高岡工業専門学校(工学部)にて。戦前の高岡高商時代から、同講堂は「高岡の鹿鳴館」と呼ばれていた。



1968

全共闘運動

学内デモと、五福構内に出動する機動隊。大学本部占拠、以後各学部でストライキが起こっていた。

2015

地域との共育

教育・研究活動と併せ、近年では地域社会への貢献が大学の役割として重要なものと考えられるようになりました。富山大学3キャンパスでは、古くから公開講座などの活動を行っており、地域に根付いた活動を進め、市民の皆さんと共に歩んできました。

公開講座

生涯学習の拠点として
学習の機会を市民に提供。

富山大学では、平成8年度から設置された生涯学習教育研究センター（現在の地域連携推進機構 生涯学習部門）をはじめとして、それぞれのライフスタイルに合わせた学習の場を提供しています。その一つの取り組みに公開講座があり、講座には「教養講座」「語学講座」「体験講座」があります。

講座は、教育の研究内容を基に構成された講義を中心としたものはもちろん、外国語や料理、ゴルフなど幅広い講座を展開。社会貢献の一環としてだけでなく、生涯学習の拠点として、学習機会を提供しています。学生や院生に限らず一般市民も気軽に受講をすることができます。



現在の地域連携推進機構 生涯学習部門の前身にあたる、生涯学習教育研究センターの開所式（1997年）（写真上）と、公開講座の様子（写真下）。学内の他、県内各地での出張講座も行なわれていた。



▲高岡短期大学時代に行われていた公開講座。参加者の年齢も幅広い。

Voice

いかに大学を開放するか。
富山大学特有の知的財産を、市民の皆さんに。

平成26年度の公開講座は、12月の段階で71講座を開講し、延べ643名の受講者がいます。国立大学では極めて多く、冊子の配布やホームページでの情報発信など幅広く受講を呼びかけています。そのため、受講者層は講座内容にもよりますが、シニア層を中心に一般の方も多く利用されています。公開講座は、大学特有の知的財産をいかに一般市民の方に公開し提供していくか、そのプログラムだと思っています。そのため専門的な講義だけでなく、他では習う機会が少ないパラエティーに富んだ講座を設けて、楽しみながら学習できるよう心がけています。また、足を運びやすいよう、土曜日や夜の時間だけではなく、日中の時間



地域連携推進機構 生涯学習部門 専任教員
藤田 公仁子 教授

帯での開催に取り組んでいます。講師は本学の教員をはじめ、市内の職人さんを招くこともあります。また、市民学習センターや県民カレッジなどとの地域におけるヨコの連携もとれ、修了者には県民カレッジから単位を認定される講座もあります。地域と深くつながりを持ちながら、一般の方でも安心して学習できる環境を提供していくことが、公開講座の大きな目的です。

和菓子を作って日本の伝統行事と食文化の大切さを考えてみよう（2010年）



韓国語講座（2010年）



塑造人体ヌード制作（2013年）



一般教養や外国言語・文化の学習、健康・スポーツの実践、調理体験など、多様なジャンルの講座を展開中。

県デザイン経営塾

「デザインマネジメント」の
理解と習得を地元経営者へ。

地域の企業が誇る、モノ造りの優れた技術や地域文化を土台においた経営活力。経営者がこれらを活かしながら、ブランド経営・商品戦略・デザイン戦略の基盤となる市場への理解を深めることを目的に、県デザイン経営塾は県内各地で2006年より毎年開催されています。現代の生活者が共感する魅力と、地域の独自性を念頭に、「地域活性化戦略の方向性」を模索しています。

Voice

会場を巡回しながら
「つなぎかた」を学ぶ。

高岡短期大学と富山大学が合併した翌年の2006年から毎年行われている県デザイン経営塾は、デザイン経営力の醸成を目的とした県と芸術文化学部との連携事業です。9回目となる2014年度のテーマは「コンテンツ、情報、人のつなぎかた」。富山県が持つ様々なコンテンツの中で、インターネットにおけるトレンドを意識しつつ、どのような情報として発信し、どのようにないだらいのかを取り上げています。地域を二カ所に絞っていた今までは異なり、呉西エリアで5つの会場を巡回し各セッションのテーマに精通した講師を招き、講義やワークショップを開催。魅力あるこだわりの会場で、新しい人やエリアとのつながりの中でデザインを学び、発信させる手段を検討していききました。

▲「黒部市宇奈月温泉活性化計画」のテーマのもと、フィールドワークを通じて観光デザイン経営のあり方を探った。（2007年／県デザイン経営塾2）



▲「地域固有の資源を活用した商店街のコミュニティ・デザイン」をテーマに井波町でフィールドワークを行い、商店街の将来を考案した。（2012年／県デザイン経営塾7）



▲2014年は「（コンテンツ、情報、人の）つなぎかた」をテーマに高岡市の工房や水見市のワイナリーを会場に開催された。



県デザイン経営塾実行委員長
芸術文化学部 有田 行男 准教授

県デザイン経営塾9 session4の会場となった、カフェ uchikawa 六角堂。

高大連携

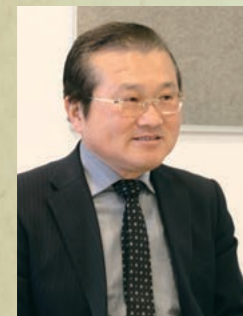
高校―大学間の連携教育。
直接伝える理学の魅力。

子ども達の自然科学に対する興味が希薄になりつつあり、「理科離れ」が社会状況の象徴のように指摘されています。現代の子ども達に、自然科学の魅力や最先端の科学を分かりやすく伝えることが必要と考え、理学部所属教員が中学や高校に向いて講義・実験を行う「出前講義」や、高校生自らが富山大学を訪れ、理学部の魅力を肌で感じることができる「大学訪問」など、多数の企画を実施しています。

Voice

高校生の要望に応じた
講義、実習、実験を。

東海地方には理学部のある国立大学は2校しかありません。そのため理学部を目指すこの地域の高校生は、進学先として北陸エリアに目を向ける方が多く、実際に理学部学生の出身県は多い順に富山県に次いで石川県と愛知県（ほぼ同数）です。今年富山・石川、岐阜、愛知県内の高校で理学部の紹介、模擬授業、出前講義を行いました。その目的は早い段階で理学に関心を持ってもらうことです。その結果「理学について興味を持つ」という感想や「数学、理科の教員を目指す」に向けて、理学部へ入学すること幅広い知識が身に付くことが分かった。など、理学部を将来の選択肢の一つとして考える者も出てきました。豊かな自然に恵まれた富山大学の魅力を、これらの機会を通して受験生に伝えています。



理工学研究所
岩坪 美兼 教授



立山では自然観察実習や研究を行っている。実習の様子。



砺波高校で行った、出前講義による講評の様子。



富山中部高校で行った課題研究指導。実験内容や今後の方向性などについて、分かりやすくアドバイス。

の歴史 考究の歩み

日本のみならず、海外からも注目を集める富山大学の研究内容、長きにわたり、地道に積み重ねてきた日々の研究成果は、まだまだ進歩の可能性を秘めています。



小泉 八雲 (ラフカディオ・ハーン)



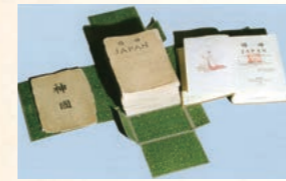
馬場 はるゑ

馬場家の寄贈によって建てられた旧制富山高等学校のヘルン文庫(右)。現在のヘルン文庫は、五福キャンパスの中央図書館5階に開設されており、第2・3・4水曜日の13～16時に一般公開されている。

ヘルン文庫

ハーンを研究することは、古来日本を研究すること。

五福キャンパスの中央図書館には、「怪談」などの著書で知られる小泉八雲・ラフカディオ・ハーン(以下ハーン)の蔵書を集めた「ヘルン文庫」が存在します。ハーンは随筆・紀行文・文芸批評・民族学・翻訳など多数の著書があり、外国では日本を知るためにハーンの研究が行われている程です。ハーンはその生涯の中で富山へ足を運んだことはありませんが、ハーンの死後、関東大震災で貴重な文献が多数失われたことから、小泉家では保管されていた蔵書の譲渡が検討されました。小泉家からハーン研究者でもある実弟(田部隆次)を通じて相談を受けた旧制富山高等学校初代校長の南日恒太郎氏が、旧制富山高等学校創設に多大な資材を投じた馬場はるゑ氏に寄付を仰ぎ、蔵書の購入が実現したので、そして開校記念に寄贈され、今はヘルン文庫として大切に保管されています。現在、ヘルン文庫では2000冊以上の洋書や和漢書に加え、ハーンの晩年の大作「神国日本」の草稿を保管しています。今後も貴重な研究資料としての活用が期待されています。



神国日本の直筆原稿とその刊本。

ヘルン文庫がつないだ ハーンとフランス文学。

私はフランス文学が専門で、当時は詩人ルネ・ヴィヴィアンの研究をしていました。彼女が別のペンネームで書いた「二重の存在」の中に、ローマ字で書かれた「蜜」に関する俳諧が載っていました。ヘルン文庫があることで、ハーンについて研究している方が全国からやってきます。その方々に「蜜をテーマに俳諧を作った方を知りませんか？」と訪ねたところ、ある八雲会の方が「八雲の著作の中に、蜜についての俳諧を集めているエッセイがある」と言われ、調べてみると明らかにハーンの著作から引用していることが分かりました。ハーンに関して、まだ知られていない部分がたくさんあります。私はフランス文学とハーンとの関係を、アウトプットとインプットの両方から今後研究していきたいと思っています。



人文学部 中島 淑恵 教授

創薬

産学官間が連携して創る、富山県オリジナルの薬。

薬業は、江戸時代から「クスリ」の富山」として、富山県の伝統ある産業を代表するものになっています。1893(明治26)年、富山の売薬業界挙げての協力の下に富山薬学校(私立)が設立されました。幾多の変遷を経て、120年以上に及ぶ薬学の歴史の中で、様々な研究・商品開発が進められました。その伝統は富山大学薬学部、附置和漢薬研究所と富山医科薬科大学にも受け継がれ、和漢薬研究の振興に貢献してきました。3キャンパス統合後、富山大学医学部、薬学部、和漢医薬学総合研究所になった現在でも、フォーラム富山「創薬」を中心にその意志は受け継がれています。産学官間の情報交換および交流を促進するとともに研究開発の推進を図り、国民の保険医療福祉の向上を目的としたフォーラム富山「創薬」。産学官間の交流の場として15年前から現在まで続いています。年数回の研究会を開催し、大学各講座や研究機関での研究テーマについての基調講演やディスカッションを行い、新しい薬の開発の芽を育てていく場を提供しています。

本学の薬学に関する 教育機関の変遷

- 1893年(明治26年) 共立富山薬学校(私立)
- 1909年(明治42年) 富山県立薬学専門学校
- 1920年(大正9年) 富山薬学専門学校
- 1949年(昭和24年) 富山大学
- 1975年(昭和50年) 富山医科薬科大学
- 2005年(平成17年) 富山大学(3大学統合)



富山県立薬学専門学校の分析実習室。富山市による都市ガスの事業が1913(大正2)年に開始されるまで、実習にはアルコールランプや石油コンロが使用された。



富山県立薬学専門学校時代～富山大学(薬学部の五福キャンパス移転前)の奥田薬園(左)と昭和40年度に移転を完了した寺町薬園(上)。現在は薬学部附属薬用植物園として杉谷キャンパスの一角で、風邪薬から抗がん剤に至るまで様々な薬の原料となる約2000種類の薬用植物が栽培され、一般公開も行われている。



フォーラム富山「創薬」

薬の研究開発と富山県の活性化を図り、医薬・バイオを中心とした分野での産学連携を盛んにすることを目的にした、フォーラム富山「創薬」。富山医科薬科大学、富山県、富山県薬業連合会が協力し、2000年2月に発足しました。フォーラム内の富山オリジナルブランド医薬品開発研究会により、富山発のオリジナル配置薬「バナワン」や「エッセン」が開発されました。



15年前、第1回研究会と風景とグラム。



次回で第41回を迎える研究会。参加者も大幅に増えた。

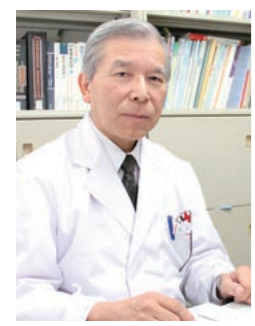
アビガン(ファビピラビル) 研究の歩み

薬都富山で誕生した「アビガン」が世界に注目され、必要とされるまで。

2014年夏に流行したエボラ熱の治療薬として期待されている、薬都富山で誕生したアビガン(一般名ファビピラビル)が世界的に注目されました。共同研究者の白木教授によると「2000回以上の実験を繰り返し、現在のアビガンにつながる化合物T-705を発見したので、そして、アビガンはインフルエンザに効く新しい抗ウイルス薬として開発され、承認された」とのこと。ただ、当時の学会発表はほとんど話題になりませんでした。その同じタイミングで、インフルエンザ薬として、タミフルとリレンザが発売されたからです。白木教授は「当時の製薬関係者は、新しい抗インフルエンザ薬は何個もいらないと考えたのでしょ」と話す。そのため一度開発がストップすることになります。再び注目されるようになったのは2005年に猛威をふるった鳥インフルエンザに対し、T-705に効果が認められると発表されたのがきっかけです。「これまでの治療薬は、ウイルスの増殖を閉じ込めることで、感染の拡大を防ぐ効果があります。しかしT-705はウイルスの複製そのものを阻害し、重症感染症に対する有効性と耐性ウイルスを生じないという特徴を発揮します」と白木教授。しかもインフルエンザに似た多くのウイルスにも効果が期待できるということです。



白木教授をはじめ、たくさんの方々関係者が長い年月をかけて創り出した新薬アビガン。今後の普及が期待されています。



医学部 白木 公康 教授

世界の歴史の連結

アジア各国を中心に100以上の機関と大学間や部局間での協定を締結してきた富山大学。さまざまな交流活動で輪を広げ、国際水準の教育や研究を実践しています。海外を教室にした留学生活は、今や学生にとって身近な学習手段となりました。

大学全体から各学部単位まで、幅広い国際交流が専門分野を発展させる礎に。

富山大学では、25機関と大学間交流協定を締結しており、そのうち21機関はアジア地域で、中でも中国との協定は13機関に及んでいます(2014年6月19日現在)。また、部局間交流協定では、85機関の部局と締結し、その中でも中国は24機関と、アジア・中国との交流協定が多く



中華人民共和国遼寧大学と大学間交流協定を締結。当時、富山大学にはまだ外国の大学との交流実績はあまりなく、大学間としてはこの協定が初めての締結であった。この協定締結を皮切りに、他大学とも交流協定が交わされるようになった。(1984年)

見られます(2014年11月13日現在)。富山大学と中国との交流は古く、「日本国富山大学と中華人民共和国遼寧大学との間の友好・学術交流に関する協定書」が承認されたのが1984年。それ以降、学内共同教育研究施設として「国際交流センター」や「国際交流会館」などが設置され、海外からの留学生の受け入れや世界で活躍できる人材の育成に対し、支援体制の充実が図られました。



研究者の交流

学術、技術、情報の交換。海外から見た富山大学。

海外の大学・研究機関と大学間交流協定および部局間交流協定を締結することで、学術研究の展開や研究者の活動をサポートし、国際交流を促進しています。また、優秀な研究者の受け入れを推進するにあたり、アジアを中心とした実績を拡充しつつ、それ以外の地域においても協定校との交流を推進。新たな交流の輪を広げています。



ベトナム軍医大学での学長表敬訪問。(2013年)



重慶医科大学(中国)の学長一行が附属病院を視察。(2012年)



モンゴル医師研修団が民族薬物資料館を視察。(2009年)

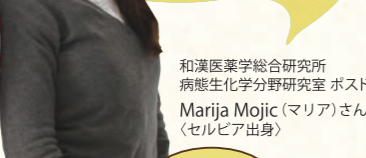
タイ国パタナシン芸術大学の教員が、本学芸術文化学部で日本画の実習を受ける。(2012年)

友人が済木先生の元で研究をしていて「富山大学は研究するのにとてもいい環境」と教えてくれたのがきっかけで富山へ来ました。富山大学周辺に病院・リサーチセンター・薬学部・医学部、医療に関して全てコンパクトにそろっているのがとても素晴らしいです。いろいろな分野の人と気軽にコミュニケーションがとれる環境なので、連携がしっかりとでき研究もはかどります。

身体を守る免疫系細胞に興味を持っていて、がん細胞に対する免疫応答を光で視認できるように、早川准教授とともに特殊な装置を使って解析しています。富山は食べ物がとても美味しい街です。ただ、街へ行くとき英語が話せない人が多く、また英語表記が少ないので困ってしまう場面もあります。外国人に優しい国際的な街づくりを期待しています。



和漢医学総合研究所 病態生化学分野研究室 ポストドク Abdelhamed Sherif Mohamed Diaa Eldin (シェリフ)さん (エジプト出身)



和漢医学総合研究所 病態生化学分野研究室 ポストドク Marija Mojic (マリヤ)さん (セルビア出身)

身近になつた学生の海外留学

未知の世界を知ること、無限に広がる自己の世界。

グローバル社会が進展する中で、富山大学でも学生の海外留学が増えています。学問の成果はもちろん、現地の学生や他国の留学生との交流、その国への深い理解、そして何より自分自身を大きく成長させる貴重な時間...と、海外留学によって得られるものは計り知れません。

学生からの問い合わせが多い人気の交換留学先として、マレー州立大学(アメリカ)があります。ただしTOEFL iBTまたはIELTSで大学が定めたスコアをクリアすることが必要のため、留学の決意と同時に、英語を熱心に勉強する学生が多く見られます。

また、実学に重きをおいた教育を展開するラハティ応用科学大学(フィンランド)とも、強い結びつきがあります。デザイン学部でも企業との産学協同プログラムをはじめ、実践力を身につけるよう共同で課題に取り組み、海外で課題発表を行っている。

富山大学では、短期の語学留学や大学間・部局間の交流協定を結んでいる大学への交換留学などさまざまなニーズに合わせた留学制度を用意し、バックアップしています。今後も、協定を土台とした、学生の海外留学が期待されます。



初開催された相互交換展。(2002年)



マレー州立大学への留学中の様子。



交換留学は私にとって未来のパスポート

アメリカケンタッキー州にあるマレー州立大学へ、2012年8月から2013年5月までの約1年弱、行ってきました。前年度にマレー州へ留学したゼミの先輩から話を聞いたり、写真を見せてもらったりして興味を持ったことがきっかけでした。また、就職活動を意識して、経験を積んでおいたほうがいいかな、と思ったからです。

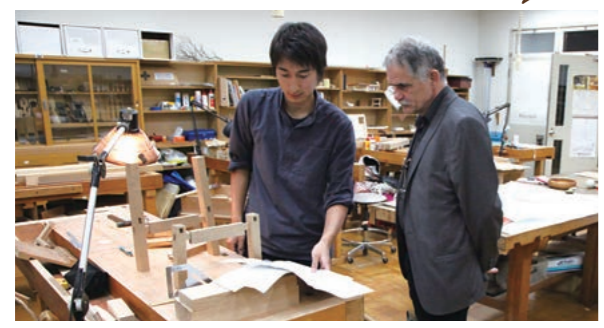
留学前にTOEFLを受験し、指定の点数を上回ったので、正直現地でも余裕だと思っていましたが現実は厳しいですね(笑)。なかなか話が聞き取れません。最初はこちらから話す勇気もなく、苦労しました。それでも自らコミュニケーションを図る努力をしました。パーティーなどにも積極的に参加し、とにかく自分から話しかけること。暫くして、外国人とのグループ活動があって、そこで皆が嫌がることを率先して行い、会話を交えることで、最終的にグループをまとめることができました。就職活動には、もちろん役立ちましたよ。通信業界に就職が決まっています。



55回も続いている、大学で最も大規模なダンス大会「All Campus Sing」。



マレー州立大学へ留学した経済学部4年 中村 勇貴さん



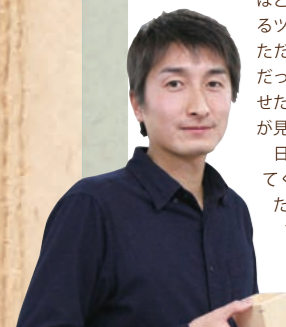
自分自身と向き合い、強くなれる貴重な時間

フィンランドにあるリミンカアートスクールに1年間在籍し、その後、ラハティ応用科学大学へ入学しました。ラハティには4年間在籍し、そのうちの1年を交換留学という形で、高岡キャンパスで過ごしました。もともと木工が好きだったので、家具や食器などのプロダクトデザインを専攻し、将来はインテリアデザイナーを目標にしています。

シンプルを求めるフィンランドのデザインには、国民的な愛嬌があり、それはどこか日本のデザインと似ています。身近な生活用品も、単なるツールとしてだけでなく、見た目の美しさにもこだわります。ただラハティで学んだ家具の制作方法は合理的・効率的なものだったので、そこに手作りのぬくもりや素材感・遊び心を反映させた、付加価値あるプロダクトにまで到達できれば、次の可能性が見えてくるように思います。

日本とは違う自由な生活環境や人間関係が、大きな影響を与えてくれました。デザインを思案するときにも、外の世界に行っていたからこそ「日本らしいデザイン」の感覚を掴めるようになりました。自分を見つめ直す良い時間を過ごすことができ、本当に留学して良かった、と実感しています。

ラハティ応用科学大学に在籍していた 芸術文化学研究科1年 安藤 萌さん



教員が顧みる、富山大学の築き

富山大学の設立から現在まで、時代の流れに合わせ変わりゆく学生や教員の想いと五福・杉谷・高岡の3キャンパス。今回は富山大学に長く在籍する3名の教員をピックアップし、その歴史模様についてお話を聞きました。

常に目的意識を持った学生であってほしい。

1979年に富山大学にきました。もう30年以上も前です。当時は教養部というものがあって、そこで学生に教えていました。その何年か後に全国的に教養部を廃止しようという動きが広がり、富山大学は先立って教養部を廃止しました。また大学内には90名近くの教員が在籍していましたが、まさに時代の流れですね。その頃は専門教育を受けきたのに、高校時代の焼き直しのような授業で、「教養は必要ない」とされた時代でした。現在は教養が必要という考えが主流ですので、躍起になって体制を戻そうとしている最中です。

五福キャンパスでは、今まで教養部の先生方が自分たちの考えるリベラル・アーツとして教養の授業をやっているの、我々には合わないという考えを持つ先生もいました。また、教養を作り直すときには、教養の先生も専門の授業を持つべきという二重構造を解消する意図もありました。



北村教授ゆかりの場所・テニスコート。公開講座実施のためオールウェザーに。
教養部から他の学部に移る先生がいる中、私は新しい学部やセンターなど、独自の組織を設立することを模索しましたが、今の人間発達科学部に移ることにになりました。これは私の中で一番の大きな変革です。現在は世間のニーズに沿うように、分離融合型の考えが広がっています。ひとつの知識だけで物事の対応はできない、総合的な能力を持った人も必要になってくるはず。世の中もきっとそうだと思います。

GOFUKU campus



北村 潔和教授

人間発達科学部 教授 / 副学長 (学生支援担当)

1984年に教養部の助教授として公開講座(硬式テニスコース)の開講に携わる。現在は学生支援担当の副学長として学生団体の指導に関わる。

富山大学で学ぶ現在の学生に関して、与えられた内容を黙々とやるイメージがあります。とげがなく従順な感じ。昔は学生からいろいろな意見が飛び交っていましたが、今の学生は指示を待っているという感じは受けません。それが良いか悪いかは別にして、私としては学生から意見があればそれをサポートすることができ、何をしたらいいのか分からず待っている学生に関しては、何を求めているのか分からないので困るときがあります。当たり前ですが、常に目的意識を持って、何に関しても勉強という気持ちを出してあげれば嬉しいですね。私たちも精一杯、その気持ちに応えていきます。

SUGITANI campus



済木 育夫教授

和漢医薬学総合研究所 教授

1993年に和漢医薬学総合研究所に着任。2009年から2年間、国際交流担当理事を務めた他、和漢医薬学総合研究所に関する部局間協定の締結に携わっている。

3Dメンシヨナルな研究に集中できる大学。

1993年12月に着任して20年以上富山大学に在籍しています。まだ富山医科薬科大学で統合される前のことで、それ以前は北海道大学におりましたので、「また寒いところに行くなあ」というのが最初の印象ですね。

杉谷キャンパスに私が着任した当初は、今のよう新しい病院はありません。動物施設があっただけで、素晴らしい生命科学先端研究センターや民族薬物資料館のような施設もなく、医学部と薬学部と研究所だけのシンプルな大学でした。ただ校舎の造りは当時とそんなに変わっていません。医学部と薬学部を行き来するのは現在同様、通路はまさに巨大迷路のようでした。通路がくねくね曲がっていて、丘陵地に建てられていますので、さらに悪いことに上下にも移動しています。和漢薬研究所から講義棟へ移動すると階段が変わってしまうという、慣れないと毎日がエキサイティングな部分は昔と同じままです。笑。

杉谷キャンパスが昔と変わらなず特徴的なのは、東洋医学・西洋医学、薬学・医学、基礎・臨床と3Dメンシヨナルな大学であることです。全国的にみてもここまで集中して揃っているのは本学しかありません。和漢薬の最先端研究を行えるのも実に素晴らしい環境です。東洋医学と西洋医学を同時に学ぶ環境はなかなかないと思います。



◀着任より2年後、教室員と研究所の屋上にて。

学生に関しては、良い意味も悪い意味も含めて、この20年間で均一的になったように感じています。着任当初はユニークで奇抜な学生が多くいました。現在在籍している早川准教授や横山助教は私のところの優秀な卒業生で、個性が強く留学の話をしたら、当時は身を乗り出して聞いてきました。今の学生は留学の話をして「1週間なら」と(笑)。大学のシステム自体の変化や学務が増えたという部分もあるもので、一概に学生の資質が変わったとは言えませんが、せっかく医学部、薬学部で和漢/漢方に関する研究もできる環境にあるので、大学としての特徴をどんどん出してほしいと思います。特化した自慢できる部分を全面に出していくことで、薬都富山にあるユニークな大学を創っていったら良いですね。

社会貢献という基盤は今も昔も変わらない。

高岡短期大学は、地場産業支援と後継者育成を基本に、教育・研究・社会貢献の3つを担う、国立の短期大学として設立し、1986年に1期生を受け入れました。地場の産業工芸として、銅器、漆器、木工、捺染があり、初期構想の捺染を産業デザインに変えて4専攻の産業工芸学科とし、産業情報学科との2学科制としました。地場産業のバックアップ



◀今でも親交がある高岡短期大学一期生。

TAKAOKA campus



三船 温尚教授

芸術文化学部 教授 / 地域連携推進機構 副機構長

高岡短期大学創設(1983年)より間もなく着任し、1985年の創設準備を経て、1期生から指導に当たる。現在、地域連携推進機構の副機構長を務め、地域づくりや文化支援など、地域社会の活性化を目的とした事業に携わる。

新製品を開発する上で、時として伝統は障害にもなります。大学の教育・研究の成果は、予想を超えた新風を、伝統に吹き込むことができます。高岡短期大学は、全国の産業工芸の展開を担う人材育成のモデルとなることが求められていました。そして、富山大学芸術文化学部になった今でも、企業と学生の商品開発が活発に行われ、社会貢献は受け継がれています。

創設間もない高岡短期大学の学生は2年間という短い時間の中で、エネルギーに突き進んだように思います。ちょうど、バブル経済の頃と重なります。今は、個人や社会の固定観念を疑い、その他大勢とは異なる、新規的な研究や発想が特に求められます。学生自身の知的好奇心を信じ、在学中に大学から外へ一歩踏み出してみること、そして、大学で学ぶ意味や社会で自らを生かすことを考えてほしいと思います。

情報過多の時代に必要なのは、客観的に考え冷静に分析すること。

北東アジアの経済や環境を綴った今村教授の編著書。



周囲の欧米志向の風潮に馴染めなかった部分もありましたが」と話す。「級友がいなくなったのは、第二次世界大戦中やそれ以前に朝鮮半島から日本に来た人たちに對し、1950年代末に北朝鮮が帰国を呼びかけたからです。北朝鮮に帰還する人は、朝鮮半島北部の出身者ではなく南部の出身の方が多かったとのこと。北朝

1970年代、欧米に憧れを抱く人々が多い中、今村教授は東京大学教養学部の2年生のとき、新たに新設されたアジア科を専攻し一期生の首席として大学を卒業する。「一期生として、私を含めて4人がアジア科を専攻。新歓コンパでは先生が10人、学生が4人という環境でした。いろいろな事情があって他の3人は授業を最後まで受けることがなく、ナンバーワン、バット、オンリーワンの成績で卒業しました」と今村教授。アジアに興味を持ったのは小学校2年生の頃で、理由は級友が突然いなくなったことから始まる。

「転校するとき、普通だったらお別れ会をすると思いますが、お別れ会もなくある日、級友のひとりが学校に来なくなりました。しばらくしてその級友は北朝鮮に行ったとの話を聞き、北朝鮮はどんな所だろうと思ったのがきっかけです。それから北朝鮮や中国などのアジア圏に興味を持つようになりました。」

鮮が労働力不足だったことも理由のひとつでした。赤字による公式の帰還運動は1984年までだったが、1960年前後がピークだったと今村教授はそのときの状況を話してくれた。

経済、歴史、自然環境をふまえ北東アジアを研究する拠点として。

今村教授は、経済学部で中国経済を中心に教壇に立つ傍ら、日本の国立大学では数少ない北東アジアを研究している施設、極東地域研究センターの教授兼センター長に就いている。極東地域研究センターとは中国、朝鮮半島、ロシアなどの北東アジア地域を、経済や社会、自然環境など多方面から研究する機関で、2001年に文科省の省令施設として設立されたもの。毎年、研究成果の報告やシンポジウムが開かれ、また各国との学術交流を行った上で、国際会議も開催している。「もともとは環日本海経済研究所という経済学部内の研究所でした。1997年にロシアのタンカーであるナホトカ号が福井県沖の日本海で座礁して原油が大量に流出したという事故がありました。それをきっかけとして環日本海地域の研究では経済面だけでは不十分だと、環境面も含めた研究センターが設立されました。地域経済の発展と国際協力、経済発展と資源制約、経済発展と雇用間

題、大気・水循環の変化と人間生活など、当該地域をめぐる諸問題を分析し、地域研究としての総合化を図っています」と今村教授。



極東地域研究センター
センター長

今村 弘子
いまむらひろこ

政治体制や歴史を基に
背景を考えながら
経済にアプローチする

風景や自然資源を中心に、文化価値を掘り起こしていく。

学部設立とともに誕生した文化マネジメントコースが平成27年度から芸術文化キュレーションコースへと大きく進化。美術や工芸、デザインなどの視覚芸術や地域固有の伝統文化に特化したこのプロフェッショナル職業人養成コースは、国立大学唯一の新たな分野として専門的要素を身に付ける場になっている。その新設コースの中で、「地域文化キュレーションプログラム」が用意され、奥准教授が風景や自然資源の立場から、観光を含めた地域文化に役立つ繋がりや街づくりへとアプローチしていく。「芸術文化キュレーションコースでは地域の資源



や文化の価値をいかに見出し、生み出していくかを考えることが大切です。地域の資源とは、各エリアに根付いた伝統芸能や産業もそのひとつですが、私が専門にしているのは風景や自然が中心。文化が築き上げた景観はもちろん、その地域社会や環境の中で生まれた食文化や伝統的な信仰など、地域の中にある大切な資源を活かし、文化を発展させていけるようなカリキュラムを考えています。風土景観を築くのもデザインのひとつと考え、風景学の大切さを学んで欲しいと思っています」と奥准教授。単純に考えると、風景と芸術は相反した立ち位置にありそうだが、新たな価値を創造していく上で重要な繋がりがあると奥准教授は話す。「芸術とか美術とか言われている多くのものは、博物館や美術館などの中に収められていますが、風景というものはそういった箱の中には収まらないものです。ただ、美術品と同じように、風景も人に感動を与えたり、いろいろなインスピレーションが伝わってくるというような性質を持っています。また風景は自然が勝手に作ったものと思われがちですが、実は人間の生活や人間のあり方など、無意識な部分を含めてその大部分は人との関わりの中で造られています。それを総合すると、風景も芸術の一部として考えられるし、そこから風景に触発された新しい芸術が生み出されてくる可能性もあります。あながち遠い存在ではないのです」

手を加えることで見えてくる半自然の美しい風景と環境。

東京大学農学部の林学科で「街づくりと自然との関係性」を学び、卒業後は農林水産省森林総合研究所で、さまざまな地域へ足を運び、景観や自然環境に対する調査や研究を行ってきた。日本の各地域には個々の文化が残り、展開しているという「茅葺屋根を想像したとき、イメージするのはスキダと思います。私が調査した京都北部にある丹後半島では、笹で屋根を葺いているのが当たり前でした。確かにこの地域は笹が豊富で、また使うまでの手間がそれほど掛からない良い材料です。雪を防ぐのにも最適です。このような民家や森林が風景を創っているわけです。もちろん住む人は茅葺屋根を嫌がって建て替えてしまうこともあります。でも文化的価値として守っていくという動きもあり、実際に都市周辺の学生や地域の人たちなどと一緒に再生活動にも関わっています。ただ、そういうものを文化遺産のような形で守った方がよいかどうかというのは一概に言える問題ではありません。そこから先は地域の人が茅葺屋根に対してどのように価値を見出し、どう使用していくかだと思います」と奥准教授。最後に風景と自然環境についてこう話してくれた。「環境が大切なのは誰もが分かっていること。でもそれは単純に木を伐つてはいけないという意味ではありません。木を伐ることや魚を獲ることも大切なことです。自分たちの地域にあるものをきちんと自分たちの日常エネルギーに代えたり食料にしたりするなど、ある程度手を加えることで、人間と自然との関係を築いていく。それが伝統文化や風景学へと繋がっていくはずですよ」



笹葺き民家解体調査の様子(右)と奥准教授の著書(左)。

芸術文化学部
准教授

奥 敬一
おく けいいち

風景学の立場から
芸術文化を創造する
プロジェクトを始動

「全国大学サイト・ユーザビリティ調査」 本学ウェブサイトが全国1位を獲得

株式会社日経BPコンサルティングが行った「全国大学サイト・ユーザビリティ調査2014/2015」の調査結果が発表され、本学ウェブサイトが総合スコアランキングで全国1位となりました。同調査での総合ランキング1位の獲得は今回が初めてとなります。

この調査は、優れた大学サイト構築の指針を提示することを目的に、2004年から毎年行われています。全国の大学211校(国立大学67、公立大学18、私立大学126)を対象として、大学サイトのユーザビリティ(使いやすさ)を調査項目毎に評価したものです。

本学ウェブサイトは2013年4月にリニューアルし、デザインを刷新するとともに、ユーザビリティに配慮して、どなたでも見やすく使いやすいウェブサイトを目指しました。レスポンス・ウェブデザインを取り入れ、スマートフォン、タブレット、PCなど、あらゆるデバイスに最適化したウェブサイトとなっています。

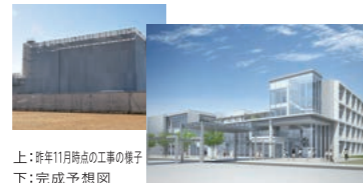
今後も国立大学として、教育・研究、社会貢献活動など、本学に関する情報を分かりやすく提供するために、ウェブサイトの品質の維持に努めています。



● 富山大学ウェブサイト
<http://www.u-toyama.ac.jp/>

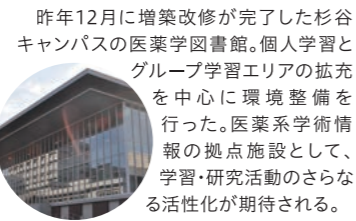
夢があり個性きらめくキャンパスづくりに向けて

本学では、教育環境の充実や、災害時における防災拠点の整備に向けた施設の建設・整備に取り組んでいます。



上:昨年11月時点の工事の様子
下:完成予想図

五福キャンパスグラウンドの横で工事が進む工学系総合研究棟(仮/1月末完成予定)。学生の教育研究施設として、高度で多様な教育プログラムを実践する。また、問題解決に十分な対応力を有する人材育成に資するとともに、産学官の協働拠点としての役割を担う。



昨年12月に増築改修が完了した杉谷キャンパスの医薬学図書館。個人学習とグループ学習エリアの拡充を中心に環境整備を行った。医薬学術情報の拠点施設として、学習・研究活動のさらなる活性化が期待される。



上:2階の増築エリア
下:グループ学習室1



左:五福キャンパス/右:高岡キャンパス

災害対策プラザが、五福・杉谷・高岡の各キャンパスと学生寮の計4カ所に建設された。災害時の対策本部機能と備蓄機能を併せ持つ施設として整備が行われた。

- Tom's Circle - 各キャンパスで活動するクラブやサークルを紹介!

街なかメイクアップサポーター



イベントで
まちなかを
盛り上げよう!

富山市総曲輪通りにある「富山まちなか研究室MAG.net」を拠点に、まちなかを盛り上げるため、様々なイベントの企画・運営を行っています。基本的に園児や小学生を対象としたイベントが多く、例えば市内の園児約300名がまちなかに集まり、段ボールで作成した巨大キャンパスにお絵かきをする「お絵かきプロジェクト」などがあります。

また、イベントを行うだけでなく、まちなかの情報発信のために、まちなかMAP作成や、市内電車沿線図作成なども行ってあります。街アップ(略称)は、こどもや学生たちだけでなく、大人との関わりも多いので、社会勉強がしたい方や刺激がほしい方は、ぜひ街アップの活動に参加していただきたいです。就活のネタにもなりますよ!

富山大学医学部薬学部弓道部



一緒に楽しい
弓道ライフ!

みなさんは弓道と聞いて何を想像しますか?「すごく力が要りそう」とよく言われますが、最初は弱い弓からスタートして、それが無理なく引けるようになったら徐々に強い弓に変えていくので筋力に自信のない人でも問題ありません!かっこいい姿勢を毎日見るという点もポイントです(笑)。

私達は医薬系キャンパスの団体ですが、医薬系以外の大学が参加する大会にも多く出場し、同じ舞台上で戦っています。また、五福・高岡キャンパスの弓道部とも交流をして、互いに切磋琢磨合っています。普段は和気あいあい、集中するときは凛とした部の雰囲気も魅力のひとつです。初心者・経験者ともに大歓迎ですので、ぜひ気軽に杉谷キャンパス弓道場にいらしてください!

「第二のふるさと」で 学ぶ「後輩諸君」へ、 いま伝えたいこと。



安田 政実 さん

●勤務先 / 埼玉医科大学国際医療センター
病理診断科 教授 診療部長
●卒業年月 / 昭和 63年 3月
●専攻課程 / 富山医科薬科大学 医学部医学科

富山を離れて早22年(富山で過ごした11年間の2倍)になろうとしています。当時は今ほどには温暖化や異常気象が状態化しておらず、冬になると、富山らしく雪が降っていました。山から、雪かき(とくに車の雪落とし)の毎日でした。勿論、その雪のお陰でスキー場にはよく通いました。私が病理の大学院生として暮らした部屋の窓からは牛岳のナイターの輝きが

眩しかったこともあって、週末の夕方になると落ち着いては机に座っていられませんでした。今思えば若気の至りでしょうか、いや、ひよつとしたら向上心に充ち満ちていたのかもしれない。私が1次なる修行の場を東海大に求めました。といっても、数年の後に富山に戻ることもその頃は将来構想の一つだったのです。結果的には、東海大で14年を、そして今の埼玉の地で間もなく8年を過ごすことになりました。私の生まれ故郷は岐阜・大垣ですが、富山は、第二のふるさととして不動の地位を確立しています。

本年6月に、卒業後初めて「後輩諸君」に講義をする機会を病理学・井村教授からいただきました。我が母校も現在は富山大学となりましたが「後輩諸君」には申し訳ないと思いつつ「富山医大卒と名乗らせてもらいました。講義をさぼり、追試をよく受けたこと、そんな思い出が蘇ってこない不徳な先輩の一人です。後輩諸君、富山での時間を大切に(本来なら勉学に励んでくださいと言いますが)思い切り遊んでください。



Message from TOMIDAI OB&OG

ハロ一先輩

現在、私は療育施設に勤務する心理士1年生、主に発達障害の疑われる幼児の評価や早期療育、その保護者支援に従事しています。大学入学当初は「特別支援学校の先生になる!」と意気込んでいた私ですが、学部生の間に多様な経験を積み重ねてきたことをきっかけに視野がぐっと広がり、現在の職を志すようになりました。



荻布 優子 さん

●勤務先 / 横浜市西部地域療育センター
心理士
●卒業年月 / 平成 24年 3月
●専攻課程 / 人間発達科学部 卒業

大学だから得られる、 たくさんの出会い。

に、今の私にできる最善は何かを誠実に考えることを叩き込んでくださった川崎教授、子ども達のためにならんと二つ返事で調査を快諾してくださった小学校の校長先生、子ども達の利益につながる親身にご意見をくださり協力してくださいました研究者の皆様のおかげです。大学にいなれば出来なかった経験、触れられなかった沢山の方々の思いがあります。それらにまだ幾らでも出合えるかもしれない在学生のみなさんのことを、私はとてもうらやましく思います。今、決して貴重な大学生の時間を大切にしてください。

- 01 富山市大庄地区コミュニケーションセンターを中心にイベントを開催しました。
- 02 イベントに参加する他大学(東京理科大学、武蔵野美術大学)の学生達と共にキックオフミーティングを行いました。
- 03 イベント前日の会場設営では、マーケットブースの組み立てや案内サインの掲示など、担当に分かれて作業にあたりました。
- 04 ワークショップスタイルの店舗は富山大学が担当。子供でも制作できる「木の笛」を展開しました。
- 05 学生自ら企画・制作した「商品」の販売を行い、接客を通して、作品に対する評価を感じることができました。



TOM'S GALLERY

LIVING ART in OHYAMA

富山市主催で行われているデザイン・アートイベント「LIVING ART in OHYAMA」は、森林に囲まれた富山市大山地域を中心に展開をしている「木と出会えるまちづくり事業」の一環として毎年8月に開催しています。12回目の開催を数える同イベントには、これまで芸術文化学部の学生がサポートスタッフとしてイベントの準備・運営に関わってきました。今年度はプロジェクト授業として単位化を図り、1年生から4年生までの学生16名が参加しました。参加学生は、イベントスタッフの一員としての責任を自覚しながら、割り当てられた担当の仕事を通してコミュニケーション力や実行力を養い、イベントの運営について学びました。

〈芸術文化学部／講師 内藤 裕孝〉

発行日：平成27年1月15日
 発行：国立大学法人 富山大学
 編集：トムズプレス専門部会

- 飯田 敏 大学院理工学研究部 教授
- 中澤 敦夫 人文学部 教授
- 廣瀬 豊 大学院医学薬学研究部 准教授
- 渡邊 雅志 芸術文化学部 准教授
- 早川 芳弘 和漢医薬学総合研究所 准教授

問合せ先：富山大学総務部広報課
 〒930-8555 富山市五福3190
 Tel 076-445-6028
 Fax 076-445-6063
 E-mail kouhou@u-toyama.ac.jp

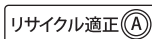
<http://www.u-toyama.ac.jp/>

TOM'S PRESSはインターネットでもご覧いただけます。

本誌は、富山大学構内などで無料配布しています。郵送を希望される方は、住所・氏名・年齢・性別・職業を明記の上、メール又ははがきでお申し込みください。

本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。再生紙と大豆インクを使用しています。



無断転載はご遠慮ください。
 印刷・製本 能登印刷株式会社

ISSN 1880-6678

Cover Story

“体育学第3実験室” 人間発達科学部

富山大学五福キャンパス人間発達科学部第3棟にある見慣れない機材が立ち並ぶ部屋。この部屋は身体の動きのしくみを様々な方面から分析するための実験室です。人は身体を動かすときに全身の関節や筋肉に複雑な力が加わります。例えば跳び箱を跳ぶという動作も研究の対象です。フォースプレートと呼ばれる機材を用いて着地時にかかる力を計測します。普段は体育館にある跳び箱が実験室に置かれている違和感。数値化した身体と向き合うことで人は初めて自分を理解し、成長できるのかもしれない。

表紙担当／田中友野 北村彩華
 撮影／小泉巧 (すべて芸術文化学部生)
 表紙監修／芸術文化学部 准教授 渡邊雅志

